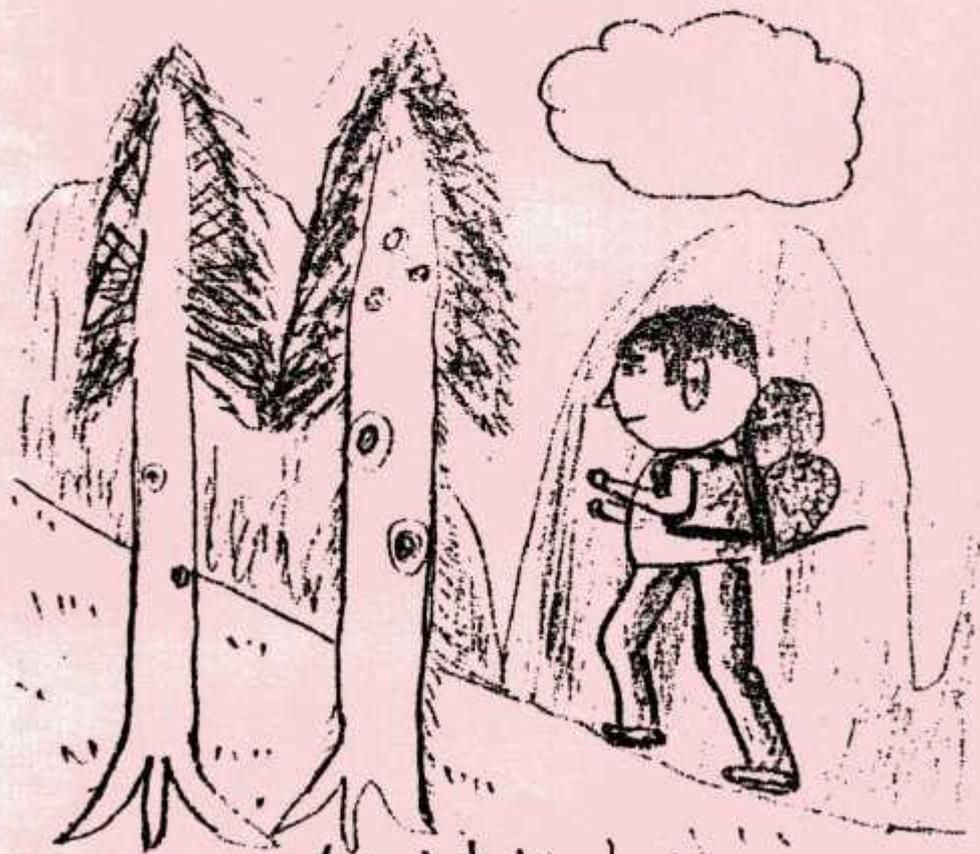


復刻

みんなで集めた

おがわの昔話



5. 56. 1. 10

小川小学校 (2. 3年上 雅美)

復刻版の電子化にあたって

ここに、昭和五十六年（一九八一年）にまとめられ、平成八年に復刻された「おがわの昔話」という小冊子を電子化いたします。沖 昭 校長先生、清水 達也 校長先生が残してくださった、大変貴重な一冊をスキャナで読み込みPDFファイルにしました。

当時の小川小学校の児童が冬休みの宿題として調べたものだそうです。筆者の名前の中には、現在の小川小学校に通う児童の保護者のお名前も見受けられます。ふるさとの昔話をたずねる三十余年前の子ども達とそれに答えてくださる地域の優しい方々の様子を思い浮かべながら「ふるさと」を感じて頂ければ幸いです。

平成二十七年三月三十一日

紀美野町立小川小学校長 柳 泰弘

復刻にあたって

ここに、昭和五十六年（一九八一年）にまとめられた「おがわの昔話」という小冊子があります。当時の小川小学校の児童が冬休みの宿題？として調べたもののようです。しかし、手もとに一冊しか残っていません。せつかくの貴重な資料を埋もれさせるにしのびず復刻することにしました。

復刻にあたっては、原文の表現をそのまま記しましたが、内容を (1)物語 (2)旧跡にまつわるお話 (3)お寺にまつわるお話 (4)昔のくらし の四つに整理しなおし、配列を変えて収めました。

私たちはだれでもふるさとを持っています。ふるさとの自然や人々にはぐくまれて成長します。そのふるさとに伝わる昔話は、私たちを優しくなつかしい心してくれます。ここに収録されているおはなしを読んで、なつかしいふるさと小川を感じてほしいと思います。

平成八年九月一日

野上町立小川小学校長 清水達也

はじめに

「小川のむかしばなし」ができました。これは、みなさんがお正月を中心にして、おうちの方や近所の方々に教えていただいたお話を集めたものです。

この中には、面白いむかしばなしと、昔の小川に本当にあったこと、それに両方まざったものとかいろいろあります。

楽しく読めて、その上小川の昔のようすがよくわかりますし、小川によさもしみじみ味わうことができます。

また、おうちの方にも読んでいただくと、「こんな話もまだまだあったのに。」と教えていただけるかもしれません。もし教えていただいたら、担任の先生まで出してください。

それから私の教えていただいたお話です。昔は

小川八幡神社の境内に神宮寺といってお寺がよにまつられた時代がありました。今は神仏分で、医王寺、安養寺、業師寺そして大観寺にわたっておまつりしています。

この神宮寺には、般若経というお経の巻物が今も小川の里に残っています。今から千二百年ほど前に天平時代という時代があります。この時代のものが百巻ほどと、その後平安時代のを合わすと六百巻ほど残されています。大昔の文字を知ることのできる大切な宝物だそうです。

このように小川にはたくさんのお話が残っていると思います。みんなで、もっともつとよい本になるように力を合わせてがんばりましょう。

昭和五十六年一月十日

野上町立小川小学校長 沖 昭

てんぐ石

森尾の山の中腹にきり立った高い岩がありま
す。昔、そこにてんぐが住んでいて岩から岩へ
ととび歩いていたということです。その岩の上
に、おもちのような丸い大きな美しい石があり
ます。この石にてんぐは時々こしをおろして山
をながめていたそうです。

ところがあるとき、その石がどうしたることか
下にころげ落ちていました。それから幾日かた
つてからのことです。下に落ちていたはずの石
が、不思議にもとの場所にもどっているのです。
村の人々は、「人の力ではできるはずがない。
きつとてんぐが拾い上げたにちがいない。」そ
こで村人たちは、てんぐ石と名付けて今も言い
伝えられています。

（てんぐ石は、三年

君がおばあさん

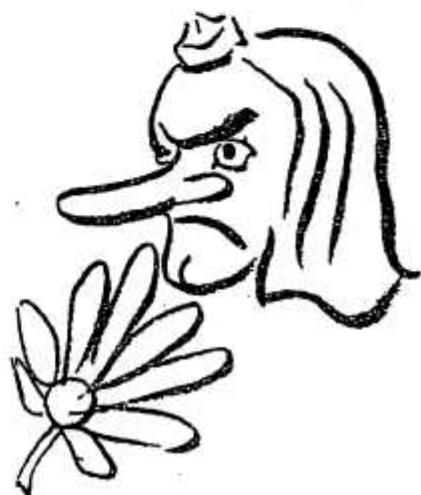
に教えていただいたお話です。）

※てんぐは想像上の怪物で、姿は人に似て鼻は
高く赤い顔で、自由に空中を飛び回るとい

碁をうちに来たためき

むかし、西おかのおくの寺におしろうさんが
一人で住んでいました。毎晩のように一人の人
が来て、おしろうさんは碁をうって楽しんでい
ました。

はじめのうちは、おしろうさんは何も気がつ
きませんでした。ある晩のことです。いつも
のように碁をうってお客さんが帰りました。お
客さんの座ったあとをふと見ると、ためきの毛
が落ちているのです。おしろうさんは、「碁を
うちに来る人はためきにちがいない。」と思う



ようになりました。

あるぼんのことです。碁をうつ人がやってくる前に、山で拾った栗をたくさんいろりにいけておきました。お客さんが来て座ったとたん、いっぺんに「パーン！」と大きな音をたてました。

お客さんに化けていたのはたぬきです。たぬきはびっくりして、大きなしっほをふりふりにげて帰りました。

それきり二度とたぬきは来ませんでした。おしょうさんは碁のあいてが来ないので、悪いことをしたと後悔したということです。

そのやしきは、どう山と違って今でも残っています。

（この話は、三年に教えていただきました。）

君がおじいちゃん



西峯のオオカミ

「オオカミのおんがえし」小川の郷にもこんな話が残っています。

むかし中田に西峯の先祖の方が住んでいました。ある日、田んぼからの帰り道、西峯峠というさみしい山道にさしかかった時のことです。

オオカミが口を開いて苦しんでいるのです。不思議に思っ、おそろおそろオオカミに近づいてみました。さらに近づいて、口の中をのぞいてみました。何かあごにささっているようです。

西峯のおじいさんが、「オオカミかむなよ。」と言って、中をよく見ると何かの骨です。思い切ってその骨をぬいてやりました。オオカミは大変よろこんで、しっほをふりふり山の中へ帰って行きました。

次の日、夜が明けてきました。おじいさんがかどに出てびっくりしました。大きなイノシシがおかれていたのです。よく見て、おじいさんがつぶやきました。

「オオカミが・・・」

おじいさんは、そのイノシシを売ってそのお金で「かんす」を買ったと。

「かんす」というのは、しんちゅうなどで作った湯わかし器のことです。（茶がま）

（この話は、三年たものです。）

さんが聞いてき



ぬまの池

黒沢山に「沼の池」と呼ばれる池があります。むかし、きこりが黒沢山へ仕事に行きました。帰りに暗くなつてからこの池のほとりにさしかかりました。すると突然、大じやがあらわれてきこりを池の中に引きこんでしまいました。

一方、きこりの家では、あまり帰りが遅いので心配していました。そこで、きこりの子どもがむかえに行くことになりました。ちょうど池のそばまで来たとき、おとうさんが大じやにのまれるのを見てしまいました。そこで子どもは、さつそく大きなおのかじやでつくつてきて、おとうさんのかたきうちに出かけました。

池までくると、大じやが出てきて、とつくみ合いになりました。そして、子どもは大じやと一しよに池にしずんでしまいました。

それから後、村の人々は大じやのすがたを見たものはいないということです。村人たちは、池のそばにおじぞうさんを作つてきこりたちをおまつりしているということです。いつの頃か

らか、しょうぶの花が池一ぱいにさくようになりました。

（この話は、三年 君がお母さんから教えていただいたものです。）

梅本権之丞

むかし、権之丞という人が住んでいました。ある日、権之丞は年貢が高すぎるので少しまけてくれるように、手紙をかいて矢につけ、弓でその矢をはなちました。

矢は高野山の大門にささりました。そしたら、高野山から、庄屋さんのところへ、「権之丞を殺せ。」という命令が出されました。そこで、庄屋さんたちが集まる所へ権之丞をさそいました。さそわれて会に出た権之丞がすわった時、後からいきなり刀で切り殺されました。

この殺された場所は、今でも美里にのこっています。今は田んぼになっていて、その中にま

つつています。一度じゃまになると 言って取りのけたら、たたりがおこったので今もまつています。

権之丞の家では、あまり帰りがおそいので、子守役の人は、二人の子どもをつれて権之丞をむかえに行きました。ところが今度は二人の子どもにも切りつけてきました。子どもをかばった子守役は切られました。二人の子はにげて帰りました。

坂本の寺の下にある道を奥へ行くと今でもほらあなが残っています。このほらあなに二人の子どもを、見つからないようにかくしました。そして、ほらあなにお化けがいると言って秘密にしていました。けれども、その後さむらいが来て、あなにはいった。そして殺された。坂本権之丞とも言われている。

（この話は、三年 丸畑 喜寛君のきいてきたものです。）

※和歌山の伝説 和歌山県小学校教育研究会編

P一五三に、興津権之丞のお話が出ています。参考にご読んでください。



百姓とカツバ

むかし、おじいさんが荷物を運んで行った帰り道、馬といっしょに生石山のふもとの小さな沼のほとりへやって来ました。

おじいさんは、馬に水を飲ませ、沼のそばの木につなぎました。それからおじいさんは、おべんとうを開いて食べはじめました。しばらくして、急に馬があばれだして沼の方へ引っぱられていきます。おじいさんは、べんとうもそこそこにして、馬を沼から引き上げようとしませんでした。しかしなかなか上がってきません。

おじいさんと、馬のしっぱを引っぱっている

カツバとがつな引きをしているからでした。馬は、おじいさんとカツバとに引っぱられてたまりません。そこで、カツバをけとばしました。カツバはそのひょうしにあおむけにこけました。そしてこけたひょうしにカツバのお皿の水がこぼれてしまいました。カツバは力がなくなり、おじいさんに、「いたずらは、もういたしません。」とあやまりました。おじいさんは、すなおに頭を下げてあやまるカツバを見て、ゆるしてやろうと思いました。

(このお話は、三年
んに教えていただいたものです。)

明君がお母さ



むかしばなし

むかし、たぬきは人を食べたなら、その人の顔そっくりになって、人をまただましてたべて、ふしぎにほねだけ土の下へかくしました。

ほかに、ばけるものがあります。かっぱ、きつね、かわうそとかです。きつねは男の人にばけて、かわうそとかかっぱとか、たぬきは女の人にばけます。こわいなあ。

(この話は二年
のです。)

さんのきいたも

孝行で長者

昔、夫婦とおばあさんが住んでいました。なんぎして、食いかねるさけ、夫が嫁に、「おばあさんを大事に見てやってくれ。海をこえて、とわいへ銭もうけにいつてくるさけ、その間にどげんしてでも、おばあさんを大事にしてやってくれ。」と言うて、夫が海をわたって行った。

三年いてきて、一年に百兩ずつもうけて、三百兩もうけた。「これだけもうけて家へいんだら、銭の三百兩もある家はないくらいや。勝負した。」と思つて、それから舟に乗つてきたら、舟に白髪のはえたおじいさんが、刀をつつて乗つてあんねやて。いっしょに乗つてきたら、海の真中へきたおりに、船頭に「ちよつと舟を止めよ。」と言つて止めさせた。

そのおじいさんの言うことにや、「お前は銭を三百兩もつてある。その銭をうらに持つてこにや、この刀で殺すぞ。」と言われて、三年もかかつてもうけたのに、えらいことになつてきた。殺されずにいんだらまたなんとかなると思つて、それをわたしてとられてしても、まあこづかいぐらひは持つちやあつたけどね。

「ただくれとは言わんさけ、一口百兩でこうてくれ。」つて言うてね。

「ごつとおを食て、ゆだんするな。」つて言うて百兩とられて、

「たいがい、たいがい。」て言われてまた百兩

とられて、

「とくとしあん。」て言われて、まあ百兩とられて、とうとう三百兩とられてしもうた。

もうしかたねえさけ、舟からおりてとまったら、その家は、むかしつり天井と言うて、金のある客をとめて、天井をダーンと落として、その客を殺して金をとる、そんな商売があった。とまりあわしたおり、そこであった。

ごつつお食てゆだんするなつて言うたさけ、ごつつおしてくれたさけ、こいつあ今夜ゆだんしたらあかんと、百兩もとられたさけよう忘れやなよ。それからね、こりやほにごつつお食てゆだんしたらあかんと言いもてうっかりねてもたらあかんと思て、一つり天井つていうのを知らんとよ、床の間へ上がつてじつとすわつてたらしわよ。

ほいたら、夜中じゅうに来て、「ねぶつたかして音せんな。」て言うのが聞こえるんでちゆわよ。ほいてね、「さあ、落とそら。」て言うてドサンて落としたさけ、「だまつてて何

もいわんな。」て言うて上げたさけ、はよはよとび出してきてね。

「こりや、おのれら、なんやえらいことして、人の銭とるつて、おのれらしようちせん。」て言うておこつたらしわよ。

「これはわしらの商売やさけ、どうぞ人に言わんとこらえてくれ。いくらでも銭出すさけ。」て言うたけど、「たいがい、たいがい」て言われてたさけ、こりやいくらでもつて言うけど、損しただけ言おか。

「ほな、三百兩だけ持つて来い。そしたらこらえてやろう。」と言つたら、「あいやそれでこらえてくれるか。それやつたらええわ。」やれやれ、三百兩もろたと思てそれからうちへ来てみたら、うちがまずしかつたんやな。かたむいて入れやんぐらいの家やつたんらしわよ。ほいて、家へ来たところが、うちのあたりを美しきれいにして、姿かわつちやんねやしてよ。こりやまあ、うら三年も便りせんときたさけ、男まえかなんどこしらえて、どうせこんなにな

ったんじやろと思つて、それからそつとあけて入つたら、ほいたら、嫁が手まくらしてねかしちやあつたんやつしよ。あつ、こりやいよいよと思つて、刀を床の間からとろうと思つたけど、「とくとしあん」という言葉をこつたのを思い出して、

「どう、いっぺんおこしちやろ。」と思つておこしたら、おばあさんを手まくらしてねかしちやあんのやつしよ。

それからいろいろ話したら、「どげしたら。」つて言うたら、「とうさん行くのに、次の間へわらでデコこしらえて、父さんのかわりにして、ほいておかいさんでも何で

も食うたびごつと、わらのでこにそなえてデコと話したん。そしたらしまいに、わらのでこはもの言わんけどな、どうしたらよかるに、どうしたらよかるに、何をこつたら何がどうなら、つて言うたらうなずいた。それから、それをこつたら、ねあがりしてもうけて、ほいで金をもつた。」と言つた。

「そうか、それはよかつた。わしも、こうこつうで、こうやつたけど、こういう話され、こういう旅館へねてまあ何や何してくれたんや。」ほいてあくる日、氏神さんへ参つてこうらつて言うて、二人つれて参つてきたんらしいわ。氏神さんへ参つて、まあるす中はたつしやでいけてよかつたなつて、おがんだらしいけど、こつうと思つたら、その戸を開いて白髪のおじいさんがでてきたんじやと。

これはおとろしと思つてにげかけたら、「まて、まて、まて、まて、おまえの金をとつたのはわしじや。これ三百兩とつたさけ、やろ。」と言つてもろたんやと。

ほいでね、孝行で長者、孝行というものは、みんなするものじやという事じや。



むすめ一人ととしより夫婦があつた。これまたびんぼうしてね、しゃあないさけ、その子は十六、七だつたんやろけど、こんなにしてたら金もうけもなし、おばあさんやおじいさんをようやしなわんさけ、「奉公しに行くさけ、おじいさんやおばあさんらどうぞ何とかしててくれたら、しばらくしたら、もうけてくるさけ。」て言うて家を出た。

うねこえ、山こえて女中や男しゆうを何人もやとつている大きな家へ奉公に入ったんらしわよ。親の代わりに、親に似た面をこうて、着がえの代わりに、ふろしきづつみに入れて持って、家においてもろた。どこそこへ用事に行けと言われたら「ハイ」と言つて、ねるところの部屋へ行つて、その面をひろげて、おがんで行くつて、ほいて

「うちへ来ているおなごは、どこそこへ行つてこいて言うたら、ふろしきひろげて手あわして、何やかんや言うといいていくほに。」て言うてわ

ろた。

「今度、親方に何ど用事色々もろて、いっぺん見ちやろら。」ていうて、そえからどこそへ行つてこいつて、親方が言うたら、行つたんらしわな。

行くつたら、またふろしきひろげておがんで話して行くんやて。いっぺんみんなで見ちやろらつて言うてみてみたら、面をつつんでてね、その親のように思て何やら話してね、そんなにして行つたんやて。ほいたら

「あいつ、もういっぺん親方に行かせて言わして、あれは何かみちやろら。」て言うて、ほいで走つていってみたんやて。ほいて、面をおいちやうさけな。

「あつ、こげなえらいもの置いちやらして、何どと変えといちやろら。」と言つて、てんぐの面をこうてきて、それと代えといちやつた。

娘が帰つてきて、ふろしきづつみをみて何ど言うかわからんさけじつとみてちやおら、て言うて、娘がふたをとつたら、てんぐの面とかわ

「つちやらいしよ、かえられちやうってしらんさけな。」「あれまあ、父さんか母さんに何どあつたんやろか。」「親のもとへもういなんなん思て、「ひまをくれ。」「て言うたら、「なんならよ。」と親方が言うたので、

「何でもないさけ、ひまをくれ。」「て言うたら、「今ごろからいんだら、若い娘やさけあぶないので、朝いね。」「て言うたら、

「何でも今いなんなん。」「て言うて、「ほやいんでこい。またじきにきてくれ。」「て言うたら、てんぐの面を持って出ていった。

夜中じゆうになつて、山のところへ来たたら、赤い火をたいてんのやて。何やしらんと思て、じつと見てたら、若い男三人が火をたいてあたってんね。そりやまあ、そこ通らにやいねやし、こりやまあどげしようにと思て、考えたんやけど、もつてるてんぐの面をかぶつて、髪をたらし、てんぐになつて、ターと走つて、ワツとそこへ行つてわろたんやと。何とてんぐが来たと思て、おそろしがつてにげてもてね、あ

と見たたら、何と、大判小判を盗んできて、がいなことわけるとこだったんやと。分けるどころか、にげてとんだんやて。てんぐに出会つたら、どんな目にあうかわからんさけな。

そしてみたら、大判小判をすっこりふるしきへつつんで持つてきた。そして親に、「何もなかつたよ。」「と言うて、長者になつた。

（孝行で長者、てんぐ長者は三年、君がおじいさんに教えていただきました。）



福井の井戸

むかし、弘法大師というえらいお坊さんが石山にこられました。そして、今の福井を通られました。その時のお話です。

長い道を歩いてこられたので、大変のどがかわいてまいりました。弘法大師は、「のどがかわいた、水が飲みたい。」と言って、杖で地面をたたきました。すると、おどろいたことに、「ぶく、ぶく。」と水がわいてきました。

人々は不思議な井戸だと、「弘法井戸」ともよぶようになりました。その井戸は、今も残っていて、保育所の馬場園長先生のそばにあります。いつまで使っていて、どんな日照りが続いても、どんなことがあっても水はなくなりません。

（このお話は、三年

やんに教えていただいたものです。）

君が、おばあち



りゅうおうせい

ぼくとこの田んぼの上、山のとつべんに「りゅうおうせい」という神様がいます。この神様があるおかげで、雨が降らない日照りが続いた時でも、水のきれたことがありません。そこで、毎年地区の人々は、七月二十八日におまいりをして、ごきとうをします。

（このお話は、四年

やんに教えていただいたものです。）

君がおじいち

押し上げ岩

中田の道を登っていくと、大きな岩があります。むかし、弘法大師さんが中田の道を通られたとき、大きな岩があつて通るのにじやまになりました。そこで弘法大師さまが、上に押し上げました。それから「押し上げ岩」と呼ぶようになりました。

弓引き松

坂本の道を登りつめた、美里町南畑とのさかに大きな松の木がありました。むかし弘法大師が、その松のてっぺんから弓を引いたところ、高野山の大門までとんだと言われています。

弓引き松という名前は、そこからうまれしました。今はこの松も枯れてしまつて株が残つてるといいます。

弘法井戸

むかし、坂本は飲み水が少なくて大変こまつていました。ある時弘法大師さまが通りかかつてこの様子をごらんになつて、岩を杖でつつきました。ふしぎなことに、そこから水がふき出してきました。

どんな日照りがつづいても、たえることなくふき出てきます。人々は、弘法井戸とよんでいます。

(この弘法大師の三つのお話は、四年

さんが、お母さんから教えていただいたものです。)

むかしのこと

昔、大し寺とかんどう寺という二つの寺を合わしました。今の永尾さんのあたりにほつけとうがあつて小川小学校の前の橋のことを、ほつけとう橋とよんでいた。

昔、正月の七日はりゅう王祭りをした。りゅう王というのは、水の神だそうだ。あまごいおどりというのがあつた。生石に、火あげ岩戸というのがあり、その岩で火をたいて雨ごいをした。

かやの木の実から油をとり、これを仏さまや神さまのとうみようにそなえた。冬はこおりにくいのでよい。

中田村としんじよ村と合へいして中田村になる。五十七、八年前、この村にこうとうが来て

何日間もかんりした。

(五年

さんのきいた話です。)

かさ石と弘法大師

弘法大師が生石山にこられました。生石山から高野山をながめられて、最後の自分の修業場所であると考えられました。

いたるところに古せきを残し、さらにかさ石の頂上において、自分の最終的な修業のところがながめられた。

雲間にそびえる高い山、そして木々のしげつている所。「ここぢや。」とその時に行座を決めた。

(この話は五年生

たものです。)

さんがきいてき

お城谷

安養寺のうら山の小高い所を掘り割ったり、平らにしたりして砦を築いている。昔の下神野へ通じる道があつて、外敵を防ぐ要害の地であつた。土地の豪族かなにかが常にここにいて監視した。その人を殿様とよんだのではないか。この山をお城谷といい迎えたのではなからうか。

弘法井戸(福井のおこり)

安養寺の近くに小さな井戸がある。弘法大師がほられた井戸といわれ、どんなに日照りがつづいても、水はたえません。福井の名前も、水がよく噴く井戸がもとで福井とよぶようになった。弘法井戸ともいいます。

御所井堰

東福井は昔、後鳥羽上皇の所有地であつたことがある。この時代に、田の用水のために川の

井堰をつくった。この費用は御所から出たので、御所井堰といって今でも立派にのこって水を送っている。

（これらの文はすべて五年

さん 五年
ていただいたものです。）

二人が共同で教え

押し上げ岩

取材 分校四年生

生石山に登る道のそばに、押し上げ岩といわれる大きい石がある。この石には昔からつたわる話があります。

中田のあるお百姓さんがくわをかたげて通りかかったある日のことです。その年は日照りが続いて、田に水がなくみんな大変困っていた時です。一人の旅僧が岩の下にこしをおろし、百姓が心配そうにしている姿を見て、わけをたずねられた。

旅僧は、お百姓さんから田に水のないことを聞いて水のあるところをさがしてやりました。それは今の「りゅうおう水」というところですが、今でもつめたいきれいな水が谷にあふれるほど流れています。

お百姓さんたちは、大変よろこんで、旅僧の休んでいる所へお礼に行ってもっと驚きました。道でじやましていた岩が上へ押し上げられていたのです。岩をよく見ると、不思議なことに押し上げた手と頭の形がくっきりと残っていたのです。今でも、その岩は生石山へ登る道の右にあります。また、その時の旅人は、高野山を開かれた「弘法大師」さまだそうです。

わたし達のお不動さま

五年

今から四百年ほど前、興津権之丞がすんでいたというやしき（今の小川小学校のあるところ）があります。昭和三年十二月ごろ、小川小学校

新築工事をするため、学校用地建設工事請負業者（野上町福井の 氏のお父さん 氏）

が作業中に、当時土木作業人が石の仏像を掘り出した。何様かわからなかったの、あるところの神様におうかがいに行つたところ、お不動さまだとわかりました。

仏像は、たて二十五センチメートル、幅二十センチメートルでいどのみかげ石でつくられており、風化して、何様か姿はわかりにくかつたとのことです。

お不動さまをおまつりするところは、たきのある場所となるが、適当な場所がなくちようど小川橋の南づめ約五十メートルの所の道ばたにがけがあり、梅本川が流れていてお不動さまをまつるのによいと思っておまつりした。

その後小川橋の南づめは開発によって発展していった。小川橋のかけかえによって、県道が新に設けられ、現在地（私の家の下、第二広場への登り口）におまつりしています。

このお不動さまは、もとより開発土木事業の

工事により、発掘されたものであり、このお不動さまのあるところは、開発が進むといふことで、土木業者の信仰があついとされています。このお不動さまを発掘した場所からは大きな梅の木のかぶも発掘され、お灯明をともし小皿（かわらけ）のようなものも何百枚も出てきた。おそらく、このお不動さまに何かの願いをかけたものであろう・・・と、

梅の古かぶのそばには、たくさんの小蛇が出てきた。冬眠していたのだろうか。（お不動さまの使いの蛇であつたかもしれない。）

このお不動さまは、四百年前に住んでいた興津権之丞がまつつていた不動さまで、興津権之丞がほろびたために、土の中にうまつてしまつたのかもしれない。

そして、福井、吉野地区の信仰家の人達はお参りし、なお毎年一月第四日曜日に会式として餅まきを盛大に行なっています。



笠神さま

吉野の医王寺は、高野山の寺領の西の端に位置して、本来は寺ではなく番所(役所)であった。それを裏づけているのが、徳川領の東の端の下佐々と吉野(旧小川村)との境の坂を「役所坂」(今の丸山付近)と今でも語り継がれています。

その医王寺に笠神さんというのがまつられています。それは「でぼ」「かさぶた」をなおす神様として昔は多くの方がおまいりしました。

それは「かさぶた」の「かさ」を笠神さんの笠になぞらえて、昔は高野山よりすげ笠を買ってきて、その笠に氏名と病名を書き、早くなおるようにとおまいりにきたそうです。すなわち皮膚病の神様として知られています。今でも時々そんなようすでおまいりする人がいます。

また、どうしてかわかりませんが、布で乳房の形を作って、お母さんのお乳の出にくい人がやはり笠神さまにおそなえして、お乳が出ますようにお祈りして帰って行きます。

夜ねしよ地蔵

医王寺にはまた一体の石仏、地蔵さんがあります。それは大きな地蔵さんです。昔は寺の入り口(県道近く)に安置されていたが、今は整理され、本堂横の寄墓に安置されています。

その地蔵さんは、近所の人々の話によると、地蔵さんの肩に馬乗りすると、夜ねしよや、寝泣きがなおると言われ、それも夜遅くまいるとご利やくがあると伝えられています。今でも時々小さい子のいるお母さんがおまいりに来ます。

(このお話は、二つとも四年
がおうちで教えていただいたものです。)

さん



かまたきやくし

かまたきおんせんの湯は、しんけいつうや、りようまちによくきます。みんなかんこうバスに乗っておんせんに来ます。おやくっさんは目のかみさまです。とおくから、おまいりします。

八日は、おやくっさんのめい日です。三日は、しようぶだきふどうさんです。お正月の三が日は、とくべつにたくさんのおまいりの人でいっぱいです。おもちまきもあって、にぎやかです。

(このお話は二年

さんのしらべ

たものです。)

※薬師如来は、人々の病気をすくつたり、災難をのぞいてくれるほとけさまです。



昔の話

清水寺(本堂)十一面子安観音

会式は毎年十七日であったが、今は四月第一日曜日である。この日はもち投げがあつて、部落はもちろん近村からも多数のさんばい者があつた。ここに伝わっている話です。

昔、ばばの先祖が昼ねをしている時、ゆめを見て目がさめた。するといつのまにか手にしきびの葉をにぎっていました。四国からほとけさまを送ってくるので、今の海南市木津までむかえにきてほしいというゆめでした。あまりに不思議であつたので、ゆめのとおり木津まで行きました。するとおぼうさんが、かんのんさんをおつてきていました。

「これを持って帰つてまつりなさい。」と言われて、かんのんさんをせおわしてくれました。

「ありがとう。」と言ってふりかえると、もうおぼうさんのすがたは見えませんでした。

それが今のかんのんさまで、ばばのかんのんともいいます。明治の終わりごろ、一度ぬすま

れましたが、今では無事もどつています。今でも安産のかんのんさまとしてまつられている。かんのんさんをもらつて来た日は九日だったので、今でも各月にかんのんこうといつておまわりしてします。

お産の近くなつた人は、ろうそくの小さいのをいただいて帰り、お産の時その小さなローソクに火をともし、赤ちゃんが無事生まれるようにおいのりします。

安養寺

安養寺には、あみださん、龍王さん、おもてには大きなじょうさんがまつられています。

昔は八月十五日に灯をともしまつりました。今はしていません。

十五日には、施餓鬼行事がある。龍王さんをまつるもちまきも年に一回ある。

(これらの文は、五年

さん、

さん二人が共同で教えていただいたものです。)

清水寺

東福井に清水寺というお寺がある。今はお堂と人のすんでいる所しかないが、昔は七堂伽藍といつてたくさんのお寺が集まっていたそう。

このお寺の庭にたくさん石の仏があった。この石の仏をその家のおじさんが調べてみると、この寺は札所にもなっていたそう。つりがねも正平時代につくられて大正時代になつてどこかへ売られてしまったそう。もし、そのつりがねがまだあつたら、この付近では一番古いつりがねだそう。

そのくらい大きかった寺だったが、いつのまにか、小川の八幡神社の奥の院となり今はさびれてしまったということだ。

清水寺では、毎年四月第一日曜日に春祭りがあり、十一面観音をまつるのだそう。この十

一面観音は、聖徳太子が作ったという話もあるらしいが、おじいさんが調べてみると、聖徳太子の時代ではなくて、平安時代の終わりごろ作られたようだと言っていた。

昔の巻物

殿垣内さんの倉から出てきた昔の巻物についての話です。

掃除して出てきた巻物は、きょうほの時代のものだった。巻物を入れてある箱や、巻物の紙を見て、ずいぶん昔なんだと思う。箱は真っ黒になっていて、ふたに何か書いていたが読めなかった。それに紙は黄色くなってしまっている。

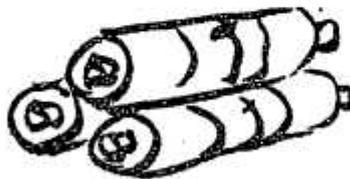
巻物の中身は、これからは、八月（旧）には小川八幡神社でおまつりをするようにということだ。その後に、それに従うという印かんと名前があった。最後に、きょうほ五年五月とかいていた。

（清水寺と巻物のお話は、六年　　さんが近所のおじいさんに教えていただいたものです。）

※享保五年は今から二百六十年ほど前、將軍吉宗の時代です。

聖徳太子は千三百年ほど前で、正平と書いていますが、天平時代ですと千二百年ごろ。

（正平というのは今から六百二十年ほど前です。）



大観寺

明治三十九年、約八十年昔のことです。この梅本地区には、大観寺があり、中田地区にはかんどう寺という寺がありました。二つの寺とも明治の始めにだれも住んでいませんでした。そのうち「合併しよう。」という、この地区の人々のねがいによって二つの寺をはいしして、新しくお寺を建てました。これが今の大観寺です。寺には、次のような書類が残っているそうです。

一、土地の田んぼと畑や山などを売り買いたした書類

二、当地から、他村へとどけたこんいん等の書類、キリシタン等のあらため書類等々

（このお話は四年　　さんが大観寺
で教えていただいたものです。）

多聞寺

西福井に多聞寺という寺があります。大正十一年に、久松がくどうというお坊さんがなくなつた後、宇恵喜助さんと、林定松さんと、吉村さんらが、和紙でつづつて作られた帳面を調べました。

多聞寺のできたのは、安永二年だということですが書かれています。徳川家綱の時代だそうです。多聞寺という名は、多聞天がまつられているところからつけられたそうです。

多聞天というのは「びしゃもん天」のことです。ほかに「あみだ本尊」と「じぞう尊」の三尊がおまつりしてあります。正月の二十八日には餅投げをして、村きとうをしました。今でも毎年続けています。

今でもこの寺に住職（お坊さん）は住んでおりません。この寺が住職にめくまれない理由は

- ・ だんかが少ないこと
- ・ 所得が安定しないこと
- ・ 高台で水がないこと

などだそうです。

(このお話は、四年

君がおじいさ

んに教えていただいたものです。)

※びしゃもん天(毘沙門天)

四天王の一つ。よろいかぶとをつけ、ほこ
を持ち、仏法(仏教)を守る。



昔のくらし

休みに食べにきた。

1 電車のなかったころは海南まで歩いた。電気がなかったころは、ランプやカンテラを使った。かい中電気がなかったので、ちょうちんを使った。水道がなかったので、井戸水をつるべでくんだ。消ぼう車がなかったので、

（これは四年
す。）

君がしらべたもので

火事の時は手でポンプを押して水を出した。

2 むぎをまぜてたべた。今は米ばかりだが、昔は麦をまぜていた。

昔の農具

田で牛にひかしたもの、

からすき。けんが。

もみを食べるようにする道具、

とうみ。りんてんき。たかみ。とうし。

今でも使っているもの、

くわ。とんが。

3 おひやくしようさんは、雨が降らないで困った時、雨ごいおどりをした。牛で田や畑をすいた。米をつく時、うすを使って足でついた。

4 昔のたばこは、きざみでそれをきせるにつめてすった。土のこたつ（すやき）を入れてねた。夏の夜は、かやをつつてねた。冬は大きい箱の火ばちに火を入れてあたたかった。

5 きものを着て学校に行った。明治の時代、雨の日は下駄、晴れの日は、わらぞうりをはいた。きゆう食はなかったので、家まで昼の

（このお話は、四年
やんに教えていただいたものです。）
君がおじいち



むかしのようす

吉野屋の所がさかみちだった。はしが、木のはしだったので、通ったら音がするし、あながあいていた。

はしをわたり終わったら、大きな杉の木があつてまわりがくらくくて、横の方が高くなって、いつも水が少し流れていました。そこにはおじそうさんがまつられていました。

新谷のところの、松の木があるところに家があつた。そこに松せのおばあちゃんがすんでいた。

新道のところが山だった。ふくいのかし山ぼしのバスていは、田んぼだった。うちの家はまだだった。

(このお話は、一年
きいてきたものです。)



つちやんの

むかしの大木

1 六十五年前に大木へはじめてでんきがついた。それまでは、ランプのあかりだった。とうじ十六しよくのでんきゆう一つでいくらとでんき代をはらつた。でんきゆう一こだと、ひるまでも、おかねがいつしよだつたので、でんきをつけていた。でんきゆう五こいじょうでないとメーターをつけなかつた。

2 毎年、四月八日は、おしやかさまのめいにちで、あまざけをそなえて、おみきをいただいた。

3 五十年まえに、分校のまえの道がついた。それまでは、上の道一本でした。そのころは家が二十五、六けんでした。

4 六十年前は、今のお大師さまは、山下しんさく君のすんでいる所にありました。お盆がくると、すいかの中をくりぬいてちようちんをつくり、つなにくつもつつかざりました。とてもきれいだつたそうです。

(このお話は、一年
てきたものです。)

さんが聞い

からの遠足や旅行はバスでした。およめさん
もバスで来ました。

むかしの話

1 福井のよびかた。

おかあさんが、一年生のころまでは、那賀
郡 小川村 東福井 といいました。

二年生の時、海草郡 野上町 福井 にかわ
りました。

2 物のはこびかた。

馬や牛にリヤカーの大きいのをひっぱらし
て、まきや、わる木をホコリまみれのデコボ
コ道を、何時間もかかつてはこんでいました。

3 車のなかつたころ。

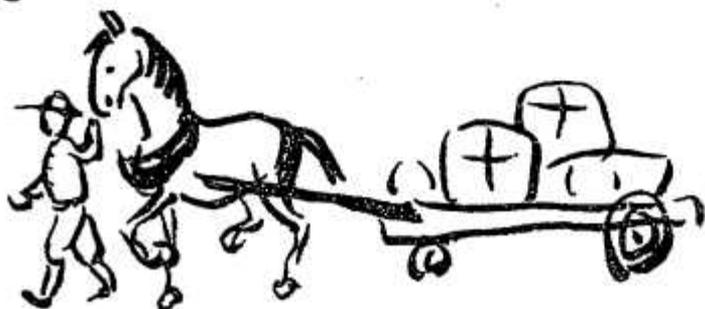
今のように車がなかつたのです。ちかくの
ガス屋さんが車を買った時、車の会社の人が
うんてんのしかたを教えに来て乗れました。
そのあと、何年もして、めんきょしようのき
まりができました。車がなかつたので、学校

(このお話は、二年
て来たものです。)

さんが聞い

先生がだまされた

おじいちゃんの小さいころです。分校の近く



には、家も、前の家もなかったもので、ぼくの家はよく見えていました。この分校は四年生までで、先生は二人で教えていました。先生はいつも学校にとまって、ぼくの家でおふろに入っていました。ぼくの家で魚をもらって帰ると中、きつねが魚をほしくなって、先生がだまされました。

(二年

君のきいてきたお話です。)

昔の百姓

昔の百姓は、すべてじきゅうじそくであった。食物、衣服、はきものを全部自分で作った。糸をつむいで、はたおり機で布をおって着物やたびまでぬいました。はき物はわらで作ったぞうりをはきました。

食事は、かゆと麦めしが主食で、副食はみそと野菜のつけものであった。魚は一年中で何回と数えるほどしが食べなかつた。それで大変へ

ん食であつて食塩も食べすぎていた。牛肉豚肉は、全然食べなかつた。

灯火(あかり)

明かりは、ろうそくや種油の時代から、石油ランプになった。今の電灯にくらべれば、大変暗いが、ろうそくや種油にくらべれば非常に明るく、文明の利器の一つであつた。今では部屋ごとに電灯をつけているが、昔は台所に石油ランプ一つであつて、この明かりをかこんで机をよせあつて勉強したり、夜なべといつて、わらなわをなつたり、ぞうりをつくつたりしてよくはたらいだ。

お正月

むかしのお正月には、塩物といつて塩のよくきいたさばやかつおを一びきずつ祝つてくれた。一匹が十銭内外であつた。一年中ほとんど魚を

食べないから大変うれしかった。「もういくつねると、お正月・・」の唄のように、胸をわくわくさしながら、指折り数えてお正月を待った。

伊勢講

部落の二十軒ぐらいが一組になって、各家々を回ってご馳走して招待し合った。一回に五十銭出しあって貯金をして、五年たつとこのお金でお伊勢（伊勢神宮）参りした。

甲申講（庚申講）

作物の神様で米麦その他の作物がよくできるように祈願した。これも伊勢講の組と同じであった。祈願の時は、どちらもはんにやしんぎょう（般若心経）を唱えた。その後は、お酒をのみながら、唄をうたったりかくし芸をしたり、夜ふけまでにぎやかに楽しんだ。ラジオやテレ

ビのない時代の敬神と慰安娯楽をかねた行事の一つであった。

小学校の採点

明治三十年ごろ、小学校の採点に、次のようながある。

天晴見事に御座候（大へんいい）

雲かすみに御座候（少し悪い）

明治三十年から四十年ごろの採点段階

最良（すぐれていい）

良（大へんいい）

可（いい）

稍可（すこしいい）

不可（わるい）

（この文は、五年

さん、五年

ものです。）
二人が共同で教えていただいた

しゅろについて

昔、この小川は、しゅろの皮むきがさかんで、今でも、ほうきを作ったり、なわを作ったり、たわしやマツトなどたくさん作られている。

「昔やったら、ここの山全部しゅろやったのになあ。あそこに見えてる山も今は檜や杉植えちやうけど、あそこも全部しゅろやったんやで。」しゅろの皮をむきながらも、おぼさんは語る。

おぼさんといつても孫までいる人だ。そういえばいつかおじいちゃんも教えてくれたつけ。

「昔は、人をやとつて、あの山へしゅろをむきによく行ったんやれ。」でも今は檜や杉ばかりで、しゅろの木はぼつん、ぼつんとその頃を覚えてくれるばかり。その木もむいたのは昔で、皮がごわごわ重なる。

そのしゅろがおとろえてきたのは、外国から安いバームが入ってきたからだだった。そのため一枚五円だったのが、物価が上がっても五円のままであるという。見かけは桑そうに見えるが

つらいそうだ。おぼさんは言う。

「この小刀見てん、こんなん売ってないで、これ何十年もつこてこんなえ小きなつたんやれ。」そう言われて見れば、持つところはこすられてピカピカ。角もずいぶん丸くなってきている。でも、ちつともさびてはいない。きつと毎日といでいるのだろう。

話をしている間にも、二枚、三枚、六枚、七枚、十枚と速いものだ。十枚ずつたばにし、わらなわでむすんで、かさにならないように工夫している。

「もうここらへんは、しゅろ少なくなつたさけ、そんなえお金になれへんやろ。」

「そうやなあほやけど、おぼちゃんのこづかいもけてんのやさけ、ちよつとでええんよ。」と笑顔で答えてくれた。

しゅろの木にどんどんもようが入っていく。しゅろをよく見てみると、下の本当に皮というようなところはかたく、上にいくと、一本一本しゅろの細い糸のようなものが重なって、ちよ

うど編んだようになってる。上になつていくとさばけていて、ボサボサとかたいかみの毛のようなかんじだ。

この皮をむいている辺りは、十本ほどしか生えていない。でもよく細い道のはたや畑のすみ、檜や杉の中にかたまつて十本〜二十本ぐらい生えている。母の話では「うちにもまだ、しゅろ山残っちゃうんのやれ。昔は、あんな奥まで取りにいったんやな。」と感心していた。ああ今でも、昔のようなしゅろ山が残っているんだなと思ふと、なんだか少しうれしくなつた。

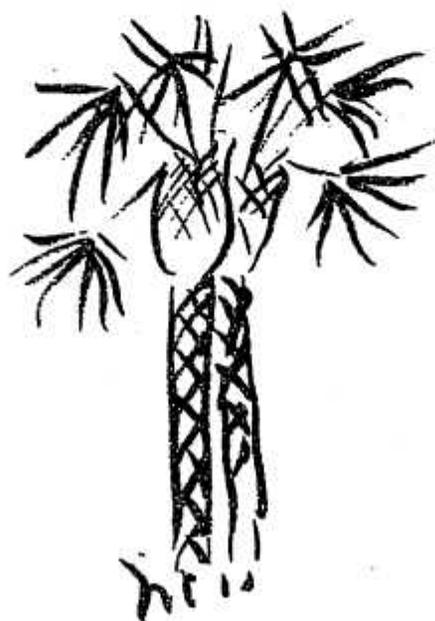
でも、皮をむくするには、こつがいるそうだ。わたしが見かけるのには、皮をむくのが老人、ほうきやたわしを作るのが主婦、主婦をやとうのが工場というふうになつてゐる。皮むきを若い人がやつているのをあまり見かけないし、しゅろの皮むきじたいあまり見かけない。これから、しゅろ工芸はへつていくのだろうか。わたしも機会があつたら皮をむきたいと思ふ。

「丸畑のしゅろむかせてつて、おばあちゃん言

うてたつて、お父さんに言うといつてよ。」しゅろをむいているおばさんは、いつも元氣である。

(この文は、六年

さんのもので



はきものの移り変り

明治の終わり頃から昭和の初め頃までのはきものの移り変りの話だ。

初めは、げたやぞうりばかりだった。ぞうりだと、雨や雪の降る日はぬれて、かわいたぞうりを二足ぐらいよけいに持って行ったりした。

大正の初めごろになって、「こんにやくくつ」というのをはく人がいた。こんにやくくつは、やわらかいゴムでできていて、ふにやふにやしていた。みんなはいたわけではないが、ぬれなくなっただけでもうれしかった。よそいきのはきものは「紙ぞうり」といって、はなおに白い紙をまいたものだった。

大正の終わりごろには、「あさぶらぞうり」(あさうらぞうり?)という、表はしゅろの新葉や、い草で作っていて、裏はゴムのはきものもあつた。これは今でもあるそうだ。このころにも「スパイク」があつた。今は野球をするときしか使っていないが、そのころは、陸上競技をする時にはいた。あめゴムでできた茶色いく

つもあつた。

昭和になると、現在のアップシューズみたいなくつをはくようになった。ぞうりは昔から現在にいたるまで使われている。

だからぞうりには、いろいろな種類があつた。竹の皮や新葉で作つたぞうり、わらぞうり、あさぶらぞうり、よそいきにはかみぞうりなど。ぞうりは、雨や雪の日にはぬれて悪かつたかもしれぬけど、いいこともあつた。今のくつなんかは、昔の悪かつたところを改良しながら、丈夫に長く使えるように工夫されてきた。

(この話は六年　　さんがおじいさんや西峯先生に教えていただいたものです。)

